

5-14(月) 千歳市 「合葬墓設置」に対する取り組み

千歳市は、北海道の表玄関である千歳空港を持っており、多くの内外の観光客が出入りする、どこのかというところ、通過客が多い市であるが、交通の要衝であり、近年は、工業誘致により、キリンビール、カレビ、セゾーニなどの企業があり、市民の平均年齢は、42.9歳で、北海道一番の若いまちである。その一方、少子高齢化や核家族化の進展により、墓を守る人が減り、墓所の管理を行う継承者がなく荒れたまま放置される墓が多く、永代供養墓への関心が高まってきた。

H16年のアンケートでは、合葬墓の認知度が低いという結果となり、8年後のH24年に再度アンケートを取り、その結果、将来的に必要との答が、大へく多くなった。その中から、宗教団体からの意見聴取を行ったが、キリスト教団体のみのため、他が寄せられ、合葬式墓地の設置は、有宗教である旨の意見があったのみであり、市民ニーズの高利も受け、千歳市合葬墓「千歳塚」の設置となった。寺の設置した合葬墓は、宗教的な概念はないため、供養祭などの行事は行わず、宗教観が異なる多くの方々の焼骨を埋蔵するため、埋蔵時や発掘時の供物や献花とは違い、合葬墓前での葬書朗読や読教などの宗教的な行為は全て遠慮していただくこととしている。1つの大きな空の中へ埋骨するので、大きな敷地も必要でなく、管理費もかからないので、1体当り5000円と安価である。我知立市では、市営墓地造成の希望もあり、条件が厳しく、出来さ望はない。この千歳市方式なら、との希望を掲げせざるを得なかった。

5-15(火) 根室市 「防災対策」について

日本の東端、根室へ着くと、到着すると「魂を、北方領土」の立看板、F1帯が目につく。根室市は、魚の水揚げで、全国に名を轟かせた。冷やこの10年で、4000人ほどの人口減少で、26000人余の人口の街となった。これを北方領土の問題が解決し、海への採集が出来る、北方での魚獲量は激減してしまい、水産業も思うにまかせられない。この街の状況の中で、H25年に北海道による防災の見直しにより、当根室市において、道が発見した「津波浸水予測図」を基に、地域の浸水予測図を作成し、津波時の避難場所、避難場所を示したハザードマップを作成し、各戸に配布。日頃より津波発生時の指針として訓練をする時の目安として、津波に下る事項を追加した。地域の自主

防災として、「もっと身近な防災を、エターナルとし、住民参加型の事業を展開した。さらに、次世代を担う高校生をターゲットに、根室市地域防災特別授業「高校生防災会議」と実施、及び403世代への啓発を行っている。根室市は半島となっていて、太平洋とオホーツク海にはさまれており、津波の危険は常に背中合せである。高台も少ないので、日頃の避難場所の認識が大切である。

知立市においても同じで、地元に住むのは、中高生であり、彼らの力を発揮してもらうような日頃から訓練の意識をもって、参加が重要である。

一六「北方領土」の問題は、全国民が関心となって、解決されるのは何年かであると痛感した。

5/6 小樽市「小樽観光大学校 案内人認定制度」について、

小樽市の歴史は、古く、栄華の時期もあったが、近年は、運河を中心にした観光都市として、発展しつつある。傍目には、多く観光客でにぎわい、ロマンチックな想像をさせる景観がある。そんな中で、感じるのは、人口の減少、高齢化率が高いことという現状があり、次世代を担うニューアープランを育成する事、案内人ガイドの育成が重要となる。小樽観光大学校は、学校長が小樽市長であり、運営委員会には、大学、観光協会、民間企業経営者でオール小樽体制であり、講座と校定収入、それに民間協賛金で運営し、公的資金はなし。と言った体制で、2級1級マスターと資格がある種類あり、現在有資格は、976人。ニューアープランの養成では、道徳の時間に子供用のテキストが作成されていて、それで「小樽の歴史など」を学んでいる。観光案内所を通じて案内を依頼される。ガイドは、無給で案内を行う。この案内に、生きがいと誇りを持って、いる。制度も定着しつつあり、今後の小樽観光を支える人材の育成が着実に進められている。今小樽の抱える課題は、通途だけへの傾向がある観光客の泊、ついでに夜の観光を楽しむというテーマが大きな課題であるという。また人口の減少を食い止めて、定住してもらう政策が必要である。との事。

北海道も札幌は、一府集中する傾向があり、他の都市は、後退して、知恵を働かしている。北海道JRのように、走らば走らば、未分にあるという基本的な課題の解決が、今日本全体として、超高齢化、人口減少に対して、制度など考えてゆく過渡期ではないか、ローカルの街をまた感じたいところである。